

平成 21 年度感性デザイン学部学外研修報告

木村 昭穂[†]・川守田 礼子^{††}・和田 敬世^{†††}・坂本 禎智^{††††}

A Report on Off-Campus Exercise of the Department of Kansei Design in 2010

Akio KIMURA[†], Reiko KAWAMORITA^{††}, Takayo WADA^{†††} and Yoshinori SAKAMOTO^{††††}

ABSTRACT

“Off-Campus Exercise” is one of the feature subjects that value the experience type study of the Department of Kansei Design in Hachinohe Institute of Technology. The program in 2010 was executed in Okinawa to study the culture, the history, and nature in Okinawa. In this brief paper, we will report the outline of the educational process including the activities before and after the program and its successful result.

Key Words: *Off-Campus Exercise, Kansei Design, Okinawa*

キーワード: 学外研修, 感性デザイン, 沖縄

1. はじめに

「学外研修」は、感性デザイン学部感性デザイン学科の専門応用科目の一つである。感性デザイン学科開設当初より重視されている体験型教育を推進する科目として位置づけられている。これまでアメリカ Wesley 大学を中心とした海外研修を実施し、感性デザイン学科独自の特色ある教育を展開してきた。しかし、平成21年度は新型インフルエンザが世界的に蔓延し、安全性確保のため、アメリカ Wesley 大学を中心とした海外研修を、那覇市を中心とする沖縄本島にお

ける国内研修に切り替えて実施した。本稿では、この沖縄研修における活動内容と、その研修成果について報告する。

2. 概要と目的

平成22年2月22日から26日の5日間にわたって、感性デザイン学部感性デザイン学科の学外研修として沖縄研修を実施した。本研修には、感性デザイン学部2年生31名、引率教員3名の計34名が参加した。

本研修の目的は、沖縄の文化、歴史、自然に対する理解力の養成、芸術鑑賞や体験学習による感性の涵養である。研修先是那覇市を中心として沖縄本島のほぼ全土にわたり、琉球王国の栄華が感じられる首里城をはじめ、沖縄戦の痛ましい歴史が刻まれた平和祈念公園やひめゆりの塔、日本国内でも有数の水族館として知られ

平成 23 年 1 月 14 日受理

† 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

†† 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

††† 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

†††† 感性デザイン学部感性デザイン学科・教授

る沖縄美ら海水族館、亜熱帯の植生を学べる東南植物楽園などを見学するほか、むら咲むら、および、沖縄ワールドでは体験学習を行った。

沖縄県は、日本において唯一の亜熱帯海洋性気候に属し、他地域では見られない特有の自然環境に恵まれているとともに、琉球王国時代からアジアの近隣諸国との活発な交易を通じて育まれた独自の歴史・文化を有している。

特に伝統芸能や陶芸・染織などの工芸分野においては特筆すべきものが数多い。今回の研修は、琉球ガラスや紅型染め、「やちむん」と呼ばれる陶器づくりなどの体験学習を織りこみ、沖縄の伝統文化を直接学べる機会を設けた。

また、沖縄には、第二次世界大戦中に国内で唯一住民を巻き込む地上戦が展開されたという歴史上の悲しい事実が残されている。本土復帰以後の現在も、島全体の10.5%を米軍基地が占めている。本研修では、沖縄の人々を取り巻く現実の厳しさを目の当たりにすることで、基地問題や平和に対する問題意識を喚起することを目的とした。

3. 研修内容

3.1 研修日程

表1 沖縄研修行程表

月日	研修内容
2月22日(月)	大学発～三沢～羽田～那覇着
	首里城
2月23日(火)	体験王国むら咲むら
	東南植物園
2月24日(水)	万座毛
	美ら海水族館
2月25日(木)	沖縄伝統工芸館
	ひめゆりの塔
	平和祈念公園、平和祈念資料館
	沖縄ワールド
2月26日(金)	那覇発～羽田～三沢～大学着

沖縄研修の日程および内容については、坂本学科長、2学年担任、引率教員、および、JTB担当者を交えて検討を行い、決定した。表1は沖縄研修の主な行程を示したものである。研修期間は2010年2月22日(月)から2月22日(金)の4泊5日である。

3.2 指導体制

(1) 事前事後指導

「学外研修」は選択科目であるが、入学時より全員参加を原則とした指導を行ってきた。本研修を有意義なものにするために、事前事後指導を徹底してきた。研修前には研修先に関する事前調査、研修後は研修内容の総括としてのレポート提出と報告会での発表を義務付けた。また、現地でのチームワークを強化するため、参加学生を3～4名のグループに分け、各グループに沖縄研修に関する課題を課し、学生間の意思疎通を図った。研修終了後にはグループ課題についての報告会を行い、「学外研修」の評価に反映させた。さらに、研修先が国内に変更になった安心感と安易な行動による事故防止のために、学生集会や通常の授業で意識の高揚と喚起を図った。学生への指導は、主に学科の2学年担任があたり、必要に応じて引率教員が対応した。

(2) 指導実施過程

「学外研修」は全員参加を建前としているが、健康上の問題など諸事情でやむなく参加できない学生も存在する。沖縄研修への参加の有無を確認するため、感性デザイン学科2年生を対象に、2009年12月15日(水)、沖縄研修参加説明会を実施した。表2は本説明会の主な項目を示したものである。研修日程、研修地、費用、現地でのスケジュール、旅行先の安全確保のための諸注意について説明を行った。特に、集合時間の厳守、成人としてのマナーを遵守するよう促した。また、新型インフルエンザが内外で蔓

延している時期であったので、健康状況調査書に健康状態や持病の有無などを洩れなく記載するよう指示した。さらに、参加者については、以後のガイダンスへの出席を促した。

表 2 沖縄研修参加説明会

項目	内容
研修概要紹介	日程、研修地、費用など
ガイダンス日程	研修開始までのスケジュール
提出書類	参加意思確認書 健康状況調査書
冬休み中の課題	研修先事前調査
厳守事項	研修先での諸注意

第 2 回目のガイダンスを平成 22 年 1 月 18 日(火)に行った。学外研修参加者の最終確認を行い、研修経費である交通費、宿泊費、旅行保険は大学が負担すること等を説明した。そのほか、研修先での諸注意や体験学習に関する補足説明を行った。

第 3 回目の最終ガイダンスを 2 月 19 日(金)、学科長、引率教員、JTB 添乗員の同席のもと開催した。研修のしおりを配布し、研修概要、諸注意や緊急時の連絡について説明を行った。

3.3 研修内容

沖縄研修は首里城をはじめとし、体験王国むら咲むら、東南植物楽園、万座毛、沖縄美ら海水族館、沖縄伝統工芸館、平和祈念公園、ひめゆりの塔、平和祈念公園、平和祈念資料館、沖縄ワールドを見学した。以下、各研修先での活動状況を記す。

(1) 首里城

首里城は、琉球王国の幾多の興亡を伝える歴史の遺産で、琉球王とその家族が住み、華麗な王朝文化に彩られた場所である。琉球最高峰の建築文化および美術工芸を見学できる。首里城では、守礼門、園比屋武御嶽石門、歓会門、龍樋、冊封七碑、瑞泉門、漏刻門、正殿を見学

した(図 1)。首里城は日本国内の城とは異なり、中国の影響を大きく受けており、漆の朱塗や赤瓦にその特徴が見られた。また、各部の装飾には国王の象徴である龍が多用されていた。首里城正殿内部の彫刻は、日本文化と中国文化の双方から影響を受けた、琉球独自の装飾にあふれていた。正殿内部の王座は御差床とも呼ばれ、図 2 のように、国内とは異なり、中国の影響を大きくうけていたことが窺えた。対して、国王の執務室である書院と鎖之間には、畳が設置されており、日本の書院風に造られていた。琉球王朝は日本と中国の双方の影響を大きく受けながらも独特の文化を築いたことが窺えた。館内には琉球ガラス、紅型染め、琉球の陶器が展示され、琉球工芸の一端に触れることができる。参加学生は、独特の雰囲気を持つ建造物や展示物に見入っていた。



図 1 首里城



図 2 正殿内部の王座

(2) 体験王国むら咲むら

読谷村の残波岬近くにある体験王国むら咲むらでは、広い園内に工房が点在しており、さまざまな伝統工芸の体験ができる。伝統工芸の体験学習内容は表 3 に示す通りである。サンゴの風鈴づくり、沖縄伝統菓子作り、漆器シーサー色付け体験、シェルアート体験、芭蕉紐でアクセサリー作りの 5 班に分かれて行った。特に、サンゴの風鈴づくりは、沖縄でないと体験できないので人気であった。

表 3 むら咲むら体験学習一覧

体験学習項目	人数
サンゴの風鈴制作	17
沖縄伝統菓子制作	4
漆器シーサー色付け体験	3
シェルアート体験	3
芭蕉紐アクセサリー制作	4
合計	31



(a) 沖縄伝統菓子作り体験風景



(b) 漆器シーサー色付け体験風景

図 3 むら咲むら体験学習

図 3 は、むら咲むらでの体験学習の様子を示したものである。(a)は、地元の方の指導のもと、学生が沖縄伝統の菓子作りを行っているところである。沖縄伝統の菓子の由来を聞きながら、揚げ菓子作りを楽しく体験できるようになっていた。揚げ具合、大きさ、味ともに良くできていたので、参加学生は満足そうであった。また、(b)は、沖縄を象徴するマスコットであるシーサーに彩色を施し、オリジナルシーサーを制作している様子である。沖縄ならではの工芸体験に、参加学生たちは真剣に取り組んでいた。

(3) 東南植物楽園

東南植物楽園は、40 万平方メートルの敷地に、世界各地から集められた 2000 種類の亜熱帯植物が生い茂る亜熱帯の植物園である(図 4)。広い園内には見慣れない樹木や花があり、沖縄の植物の生息を知ることができた。図 5 はマダガスカル原産の木の根元がタコの足のようにになっているビョウタコノキである。自然学習を通して、沖縄の風土と文化を理解する良い機会となった。



図 4 東南植物楽園



図 5 東南植物楽園内のビョウタコノキ

(4) 万座毛

万座毛は、沖縄本島中部における代表的な景勝地である。図 6 に示すように、万座毛一帯は足元がすくむほど崖が高く、琉球王朝時代に尚敬王が「万人を座するに足る」と賞賛したことに由来すると言われているところである。左端に写っている小さな人影からも、この地の雄大さが窺える。



図 6 万座毛

(5) 沖縄美ら海水族館

沖縄美ら海水族館は、沖縄本島北西部の本部半島備瀬崎近くにある国営沖縄記念公園・海洋博覧会地区（海洋博公園）内の水族館である。水族館内には水量 7,500m³ の世界最大級の大水

槽「黒潮の海」が設置され、総展示槽数は 77 槽である。なかでも世界で初めて長期飼育に成功したジンベエザメ(図 7 の(a))やオニイトマキエイ(マンタ)が人気となっている。(b)はクラゲの標本である。このクラゲは日本本島周辺のクラゲと違い、赤く発光し、毒性が強いのが特徴である。このように、美ら海水族館では他の水族館では見られない珍しい生物を観察することができ、自然学習の一環として有意義な時間となった。



(a) ジンベエザメ (b) クラゲ標本

図 7 美ら海水族館

(6) 沖縄伝統工芸館

沖縄伝統工芸館では、紅型エコバック、琉球ガラス体験、機織り体験、漆器の色付け体験の 4 班に分かれて体験学習を行った。表 3 は伝統工芸の体験学習内容を示したものである。沖縄にちなんだ伝統工芸は通常の授業では体験できないので参加学生に好評であった。特に、琉球ガラスは、ガラスの吹き付けを一度は体験してみたいと参加者が多かった。また、紅型エコバックは、鮮やかな色彩と南国らしいモチーフを描いた柄が魅力的で、女子学生を中心に人気があった。図 8 の(a)は、琉球ガラス制作体験でスタッフから指導を受けている様子、(b)は紅型エコバック制作において色付けを行っている様子である。(c)は紅型エコバックの学生作品である。どの制作体験コースもスタッフのサポートが行き届いており、作品の綺麗な仕上がりに参加学生の満足度が高かった。

表3 沖縄伝統工芸館体験学習一覧

体験学習項目	人数
紅型エコバック制作	8
琉球ガラス体験	15
機織り(ロートン織)体験	4
漆器の色付け体験	4
合計	31



(a) 琉球ガラス制作体験風景



(b) 紅型エコバック制作体験風景



(c) 参加学生の紅型エコバッグ作品

図8 沖縄伝統工芸館での体験学習

(7) ひめゆりの塔、平和祈念資料館ほか

ひめゆりの塔、平和祈念資料館、平和祈念公園を訪れ、沖縄近代の歴史学習を行った。平和祈念資料館は、戦争の犠牲になった多くの霊を弔い、沖縄戦の歴史的教訓を正しく後世に伝えるために設立されたとの説明を聞き、世界平和の尊さを再確認しながら見学した(図9)。図10はひめゆりの塔である。ガイドによる説明に耳を傾け、戦禍の悲惨さを心に刻みながら、恒久の平和を願い、祈りをささげた。



図9 平和祈念資料館



図10 ひめゆりの塔

4. 研修成果の発表

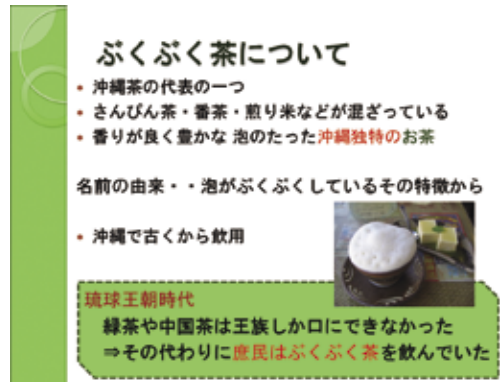
平成22年4月23日(金)に、本研修での学習成果報告会として、学外研修発表会を開催した。発表内容は、班ごとに課されたグループ課題に関する調査結果と、各人の沖縄研修に関する感想である。発表は1班3～4名で、全9班が行った。図11は発表資料のパワーポイント（PPT）スライドの一部を示したものである。(a)は班の発表表題、(b)は個別の発表表題、さらに(c)はその発表内容の一部分を示したものである。各班とも、上記のような資料構成の流れに沿って成果発表を行った。沖縄で実際に体験した学習内容のインパクトは大きく、今後の活動にぜひ活かしたいとの抱負で締めくくる内容が多く見られた。



(a) 班の発表表題



(b) 発表者の個別発表表題



(c) 発表内容の一部

図 11 研修成果発表例（PPT 資料）

5. まとめ

以上のように、本研修では、感性デザインの基盤となる歴史・文化学習および工芸・アート制作実習を実施した。以下に、参加学生の提出レポートの一部を紹介する。

- (1) 紅型染めや首里織に代表される沖縄の染織について調査した。これらの染織物の技術は、外来文化を吸収しつつ、島に自生するものを使い、それらの特徴を活かしながら確立されてきた。多種多様の染織物が今も生活に密着していることが分かった。
- (2) グループの課題として沖縄の食文化に関する調査を行った。昔から伝わる伝統の料理にはさまざまな歴史がある。単にチャンプルーといっても数種類があり、沖縄料理は大変奥が深いと思った。
- (3) 沖縄の人たちは、普段から健康に非常に気を配っている。健康に良い食生活を送っているからこそ、沖縄には長寿な人が多いのだ。本州とは少し異なる、独特の食文化を体験することができ、とてもいい経験となった。
- (4) 沖縄では、中国の医食同源という思想を元に、無駄のない食べ方をしている。本土の料

理と違い、沖縄では揚げ物が多かった。風土や歴史に基づいて今の沖縄の食文化があることが分かった。味付けの濃いものもあるが、豊富な野菜で補い、バランスの良い食生活を送っている。だから健康で長寿の人が多いと思った。

- (5) 沖縄の気候が豊かな自然を作り出し、人々の暮らしに潤いをもたらしていることがわかった。一方で、開発によって伝統的な住居の様相が変化したり、外来種によって沖縄固有の生態系が破壊されたりするなど、これまでの沖縄の景観や自然が失われつつあることを知り、残念に思った。
- (6) 美ら海水族館には、オオグソクムシ、ムラサキヌタウナギなど、不気味だがどこか愛嬌のある生き物がたくさんいた。「深海」という特殊な環境に住む、多くの貴重な生物を直接自分の目で見ることができ、知識を深めることができた。

以上のように、本研修における学習成果と実習内容への満足度がともに高いことがわかる。およそ一週間の短い研修期間であったが、参加学生たちが得た成果は大きいものであったと確信している。本研修で得た学習成果が、今後の研究・創作活動で発揮されることを期待したい。なお、「学外研修」は、今後基礎教育研究センター主催の「学外研修」に移行することになっている。

謝辞

無事に本研修を終えられたのも、ひとえにサポートしてくださった皆様方のおかげと存じます。最後に、ご協力いただきました学内外の皆様にご挨拶申し上げます。